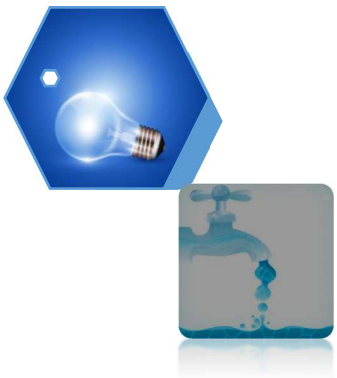
悪い癖

上田　幸子

人には無くて七癖といわれるように、どうしてもなおせない癖というものがある。私と夫にもそれがあり、お互いにそれをなじりあったり 笑ったりしている。例えば 私だが 部屋の電灯はいつもつけっぱなし なかなかきちんと消せないのだ。一方、夫は電灯をきちんと消すが、水道の水はざあざあ出しっぱなし。きれいな水を何にも使わずざあーと流しても平気。私は思わず　もったいない！」と叫んでしまう。

これらの癖はなかなか改められない。きっと、これらは子どもの頃の習慣がそうさせているからだろう。私の場合、幼い頃 貧しくて、家の電気代が初めから一定に決められている定額という契約をしていた。電灯を消そうが点けようが同じ料金を払うシステムだった。その代わり 決められていない電気器具は使えない。アイロンや電熱器等は使えない。ただ、電灯だけが使用できる電気器具だった不便な生活だったことをよく思い出す。家で洗濯機や扇風機が使えるようになったのは、私が二十歳くらいになった時だった。その時は本当に嬉しかったことを思い出す。高校生の時も、暑い日 うちわを使うだけで受験勉強をしていた。今なら扇風機は勿論、エアコンもあり快適な環境を用意して、親は子どもにお勉強をしていただいている。そう考えると我ながら本当に我慢強い子どもだったなあと今更ながら感心する。そんな小さい時の習慣がこびりついているのか、電灯はいつもつけっぱなしになってしまうのだ。暗いのは嫌いなので、どの部屋もつい電灯のスイッチを入れ明るくしてしまう。夫は　誰もいないのに電灯をつけるなよ」と言っては消している。

夫は、丹後の峰山という田舎で育ち、家の裏は山で いつも清水がこんこんと 湧き出していたらしい。台所には、夏は冷たい豊富な水が流れっぱなしになっていたそうだ。もちろん水道代は無料。いくら使っても途切れなく山から湧き出して流れて来る。その習慣が今も、平気で水道水をざあざあと流してしまうことにつながっているのだろう。いまだに水はただ、という概念が彼の頭から離れないらしい。

私が子どもの頃にはまだ水道が来ていなくて 家の近くに共同の井戸があり その水を汲むのが私の仕事でもあった。ポンプ式でなく 釣瓶をひもでひっぱりあげるという 実に原始的な方法で水を汲んでいた。力と根気のいる仕事だったから、少しの水でも とっても貴重できれいに澄んだ水をざあざあ平気で流してしまう夫が許せないのだ。まだ使えるのに流さないで。野菜が洗えるでしょう！」待って その水でお茶を冷やせるのに捨てないで！」等と、大声で叫んでしまう。

夫は部屋を次々と回りながら電灯を消しまわっている。電気代もったいないぞ！」今日も夫の大きな声が聞こえる。三つ子の魂百まで」とよくいったものだ。